

## 論文

## 仕事の中のカフカ

## —仕事を巡る手紙の芸術家としての実務家

京都学園大学 経済学部非常勤講師  
前田江利子

## 要旨

仕事ができる人間は、人を見る目を持っている。フランツ・カフカ(1883-1924)の眼は、目ではなく、「眼」であった。<sup>1</sup>カフカは、『訴訟(審判)』『城』などの一見、幻想的にとらえられる小説を書きながらも、実生活では、半民半官の公務員としての仕事を全うしていた。小説を細部にわたって観察すると、カフカの細部の描写には、人を見る「眼」を持った人間の姿がある。カフカの父親は、実業家であったし、また、労働者保険局というところは、一代で工場主に成り上がったような野心家たちを相手にしなければならぬことも多々あったであろう。カフカ自身、ユダヤ人であるが、90%以上が、ドイツ人、残りの数人がその他の民族という官僚社会で、最終的には、一等書記官まで上り詰めたのだから、やはり、仕事に対しては厳しい自分を持っていないに違いない。そのように見てみると、小説や日記から連想される夢想家とは、別の実務家としての徹底したリアリストのカフカの姿が浮き上がってくる。カフカの人を見抜く眼はやはり、最期の遺言(手紙)にも現れている。<sup>2</sup>カフカは、彼の八つ折版のノートに書き残したアフォリズムに見られるように、人間通であったのだ。本論の目的は、カフカの小説や日記から浮かび上がってくる芸術家の姿—実際に、芸術家であったにせよ—とは、別の「実務家」の一面について仕事を巡る手紙を手がかりに考察することにある。実際、その実務体験は、作家の作品にも内在的に反映されている。本論では、カフカの職業体験が反映された小説『失踪者』(„Der Verschollene“)における「カフカのモチーフ」を浮かび上がらせてゆく。

キーワード: フランツ・カフカ(Franz Kafka)、仕事、実務家、芸術家、『失踪者』(„Der Verschollene“)、手紙、メディア

<sup>1</sup> Mark Anderson は、『カフカの衣装』(Kafka's Clothes, Oxford University, 1992, S. 30)の中で、『観察』におさめられた『通りに面した窓』について次のような分析を行なっている。『通りに面した窓』は、1903年11月9日付けのオスカー・ボラック宛の手紙を下敷きしている。この手紙の中でカフカは、ボラックが「僕にとっては従来をのぞくことのできる、窓のようなものだった」と語っている。つまり、「生」から切り離された芸術家の孤独という彼の時代の問題を多く抱えていたことになる。

<sup>2</sup> Heinz Polizer がその著書『芸術家、フランツ・カフカ』(„Kafka, der Künstler, Frankfurt, 1965“)で、カフカは「マックス・ブロートに遺言することにより、彼の書かれたものの焼却という、彼の原理的決断を固執することができたが、一方、カフカは人間通であって、この決断がブロートに軽視されることは知っていた」ということは、実際に事実であるといえるだろう。カフカは、1912年10月8日(7日?) -10月(8日?)、火曜日 12時半付けの手紙で、次のように書き送っている。「僕は崩れの手紙なしには飛び降りないことに固く決心したので—最後の結末というのにもうんざりしたっていいじゃないか、部屋の主として再び自分の部屋に戻るようになるはずだから、僕は君に長い再会の手紙を書こうと思ったわけで、これがその手紙であります。」やはり、「崩れの手紙」＝「遺言」であれば、この手紙にあるように、カフカの遺言は、まさしく重要な意味を持つことになる。また、この頃、カフカは、新しくできた父の工場のために時間をとられ、執筆活動との間で、深刻に悩み、自殺まで考えるようになっていた。

## 1. カフカの仕事の概念

カフカの職歴について、少し整理してみよう。カフカは、法学博士の学位を取得後、忌み嫌っていた実生活での職業生活に入ることになる。最初の勤め口は「一般保険会社」(Assicurazioni Generali)<sup>3</sup>で、カフカは大半のエネルギーと時間をこの仕事で費やさなければならなかった。1908年の7月には半官半民の「ボヘミア王国プラハ労働災害保険局」に転職したが、集中した執筆活動を続けたいと望むカフカにとって、ここでの仕事も相変わらず、相当な負担であった。

ここで、もう少し、実務家の仕事の経歴を整理するために、博士号請求からの職歴を整理してみよう。

1906年3月16日	ドクトル請求のための口述試験
1906年4月-9月	プラハの、伯父リヒャルト・レーヴィの弁護士事務所で見習い。
1906年6月13日	国家試験
1906年6月18日	法学ドクトルの学位授与
1906年10月-1907年9月	法律実習、最初地方裁判所のち刑事裁判所。
1908年2月-5月	プラハ商業専門学校での労働保険講座
1908年7月下旬	プラハ「労働者災害保険局」の補助職員。午前8時から午前2時までの勤務。
1909年10月1日	局試補に昇格
1910年5月1日	局立案員に昇格
1913年3月1日	副書記官に昇格
1917年9月4日	肺結核と診断され、3ヶ月の休養を得る
1917年11月	オットラ、保険局に代理として恩給付退職を願い出るが、却下
1918年5月2日	勤務再開
1918年夏/秋	北ボヘミアのルムブルクへ出張。プラハ郊外のトロヤの果樹研究所で働く。
1920年1月1日	保険局書記官に昇格
1920年12月18日-8月末	療養のため、北スロヴァキアの山地タトラのマトリアリに。
1921年8月29日	保険局勤務を再開
1921年10月31日	賜暇を得て、それが退職まで続くこととなる
1922年2月3日	上級書記官に昇格

このように、カフカは、1917年肺結核と診断されたにせよ、入局以来、順を追って昇進して、退職前には、上級書記官にまで上り詰めていたことが分かる。そんなカフカだが、最初の頃は、必ずしもそんなに順調という訳ではなかった。友人マックス・ブロートに仕事場から、愚痴を漏らす手紙も書い

<sup>3</sup> イタリアに本拠をもつ、国際的な大会社

<sup>4</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer-Taschenbuch Verlag, S. 56 この手紙は、カフカは一般保険会社用の便箋で書かれており、

ている。

しかし、最初に勤めた勤務先を一年あまりで退職した後は、ずっとこの半官半民の公務員として、立派に勤め上げたことから、カフカの几帳面な性格が分かるのである。そして、人に対する仁義ということも決して忘れてはいない。自分に仕事を世話してくれた人のために、その労を感謝する手紙をマックス・ブロートに書き送っている。この手紙は、次章で考察する、『失踪者』のカール・ロスマンや学生ヨーゼフ・メンデルの言葉と重なってくるのである。

「君たちに会えたりうれしさから何かと軽卒なことを言ってしまうと、別れてからやっと、僕は突然、次のことが気がかりになった、そういうことのないよう気をつけていてくれるだろうね。

君のお父上にボルム氏のことでH・ヴァイスゲルバーに通してもらうのはそのままでもいいし、あまりよい気持ちはしないけれど、僕の名前を出してくださるのもいいが、決してお願いだから、僕が不満だとか、ポストを去るだろうとか、郵便関係のポストに就くとか、そのほか似たようなことをおっしゃらないようにしてくれたまえ。そんなことになれば、非常に苦痛だ、というのも、ヴァイスゲルバー氏は少なくとも、苦勞して僕を一般保険会社に紹介してくれたのだし、僕は、あのころの絶望状態からみて当然のことながら、大変感激して、あの人に狂ったように感謝したのだから。(..) まだ、非常に疑わしいことながら、もし僕が郵政の方で仕事を果たしたら、それはもちろんそうした宣言はせざるをえないだろうけれども、当分の間は僕も、僕に与えられたこれまでの神の思召しを爪の先で傷つけるようなことはしたくないのだ、わかってくれたまえ。」(1907年末<sup>5</sup>)

忌み嫌っている現実社会の第一歩を踏み出した、最初の勤め口は、「一般保険会社」で、ここで、カフカは、大半のエネルギーと時間を費やさなければならなくなる。その後、「ボヘミア王国ブラハ労働災害保険局」という半民半官のお役所に転職する。この1909年、1910年の年には、残されたカフカの仕事上の手紙がある。

### (1) 保険局理事会宛

ブラハ、1909年8月17日

恭順なる署名者は、1908年7月30日臨時職員として入局、1909年7月29日をもって1年の勤務期間を満了いたしますので、服務規程20条8項にもとづき、試補(Praktikant)の任命いただけますよう、謹んでお願い申し上げます。

法学ドクトル・フランチシェク・カフカ

<sup>5</sup> 「課」の空欄には、「わびしき日曜午前労働」と手書きで書かれている。また、マックス・ブロートに夜遊びの誘いに対する返事をRohrpostkarte(気送用はがき)ですぐに返事をするように催促している。

<sup>5</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Taschenbuch Verlag, S. 52f

<sup>6</sup> カフカの仕事上の手紙には、次の文献がある。Kafka, Franz: Amtliche Schriften. Mit einem Essay von Klaus Hermsdorf. Akademie-Verlag, Berlin, 1984. また、カフカの仕事上の手紙を扱った先行研究として、Strejcek, Gerhard: Franz Kafka und die Unfallversicherung. Grenzgänger des Rechts und der Weltliteratur. Facultas Verlags- und Buchhandels AG, 2006がある。

<sup>7</sup> カフカは、仕事上、勤務先の労働者災害保険局宛のものについて、多くチェコ語を使わなければならなかった。この訳文については、『手紙1902-1924』(新潮社、1992)を使用した。(1)は、チェコ語からの訳出、(2)は、ドイツ語からの訳出である。原典は、Kafka, Franz: Amtliche Schriften. Mit einem Essay von Klaus Hermsdorf. Akademie-Verlag, Berlin, 1984. S. 123fを参照のこと。

## (2) 保険局管理委員会宛

プラハ、1909年10月7日

保険技術部における担当の仕事、とりわけ(危険度の)等級分けに対する異議申し立ての公示、企業の新規等級分け等々に際しまして、恭順なる署名者は、機械技術方面における、より広汎な一般的知識(Kenntnisse in der mechanischen Technologie)を身につけることを、事実上必要であると痛感いたしております。この知識を署名者は、ドイツ工業大学のミコラシェク(Mikolaschek)教授の講義を受講することによって、もっとも徹底的に(der Gefertigte)得られるものと信じます。しかしながらこの講義の重要な部分は、火曜日と木曜日の8時から9時、および水曜日と木曜日の8時から9時半まで、いずれも午前に行なわれます、すなわち勤務時間に抵触いたしますので、署名者は万止むをえず、当該曜日には午前9時15分、ないしは9時45分に出勤方、御許可相成りたく、謹んでお願い申し上げる次第であります。

この段お聞き及びいただきました節は、署名者は、彼および彼の仕事を決定的に助長するはずであり、ますこれらの講義を受講できますことが、ひとえに管理委員会各位の格別の御厚意のたまものであることを、つねに銘記いたす所存であります。

試補

法学ドクトル・フランツ・カフカ

カフカは、1920年1月から翌年1921年1月にわたってのミレナ・イエンスカ・ポラック夫人との熱烈な文通に終止符を打った。カフカの人生を支配する「書くこと」、それに続く、注釈的な現象「役所勤め」「ご婦人方との交際」「結核」というこれらすべての事柄は、体系的な自己破壊であった。1920年12月タトラ高原マトリアリ(Matliary)で、進行し続ける結核との闘病を開始し、同病の患者たちと交流を持ったとき、おそらくははじめて形而上的な病気を現実の相のもとで、より真剣に考えるようになったのである。

病気のため、局長に提出する休暇延長申請書は、必ずしも、真のカフカの言葉ではなかった。つまり、必ずしも心が通じ合ったとは言えない義弟ヨーゼフ・ダヴィッド<sup>8</sup>によって、チェコ語の翻訳を依頼し、それを提出しなければならなかった。保険局は、休暇および年金付き退職に関して、ほとんど限りなく寛大であった。一方、カフカ自身、1920年2月には上級書記官に昇進させた。チェコ人でもなく、ドイツ人でもなく、一貫してドイツ語による教育を受けた半ドイツ人的ユダヤ人というカフカの複雑な境遇は、仕事上の手紙にも反映されていたのである。

すでに第一次世界大戦中から支配者階級のオーストリア派のドイツ人と、国家として自立を目指すチェコ人との共存は、様々な困難をカフカの勤めていた当局にも、もたらしていた。オットー・プシーブ

<sup>8</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Taschenbuch Verlag, S. 309 「僕が保険局に対して気を使いすぎているように見えるかも知れないね。違う。分かるだろう、当局は僕の病気に何の責任もないのだし、それどころか、僕の病気のせいだけでなく、すでに5年に渡る病気の進行のせいで迷惑を被っている。それにだ、僕の方は、毎日毎日、朦朧としてまっすぐに立ってられないというのに、あちらでは僕をちゃんと支えてさえてくれたのだから。」病気が進行しつつある1921年3月中旬マトリアリから友人マックス・ブロートに宛てた手紙。あれほど、忌み嫌っていた役所ではあるが、この手紙には、カフカの職場に対する気遣いが伺える。

<sup>9</sup> 実の妹オットラの夫、オットラはカフカと最も親しかった末の妹である。

ラム局長が1917年に死去した後、ドイツ人とチェコ人の役員の間いわゆる権力争いが生じ、社会福祉省は、1918年1月末、役員制度を廃止し、暫時的に、国営主義制度を導入したほどであった。大戦後のチェコスロヴァキア共和国の成立は、保険局においても大きな変革をもたらした。チェコ人たちは今まで手に入れることができなかったものを、手にするために戦い始めたのであった。支配者階級のドイツ人は後退し、オットラとの書簡で言及されるオイゲン・ブフォール氏もローベルト・マルシュナー博士もその地位を失い、二カ国語共用は廃止され、チェコ語が公用語となった。それゆえ、1920年以降の当局への手紙は、局長であるベドジフ・オトストルチル博士<sup>10</sup>宛にチェコ語で書かれなければならない、カフカは局長宛の手紙を妹オットラ、彼女の夫ヨーゼフ・ダヴィドによって、チェコ語に翻訳させた。

このように重圧に満ちた当局をカフカは、次のように、オットラに書き送っている。「当局は僕にとって、暖かいけれど重い羽布団のようです。外へはい出そうとすれば、僕はたちまち風邪をひく危険にさらされるでしょう。外の世界は、暖房がないのですから。」<sup>11</sup>

そして、「芸術家」としての「実務家」は、役所でも言葉の面において、様々な苦勞をするのである。役所で地方長官あてのかなり長い告示を口授しているとき、最後の言葉に詰まったカフカが「焼き印を押す」という言葉を見つける。それが「なまの肉で、しかもぼくから切り取られた肉でもあるかのように、吐き気と羞恥感とを覚えながらまだ全部口のなかに入れたままにしている。(それほどの努力がぼくには必要だった)。しまいにはぼくはそれを言うてしまうが、しかし次のようなきわめて驚くべき事柄については黙っているのだ。すなわち、ぼくの中のすべてのものは文学的な仕事への準備を終えており、その仕事はぼくにとっては天与の解決であり、ぼくが真に生きた存在となることなのに、ぼくはこの役所でこのようにも惨めな書類のために、そのような幸福を享ける資格のある肉体から、その肉の一片を奪い取らねばならないのだ、ということである。」(1911年10月3日)<sup>12</sup>

このような仕事の面での言葉の苦勞は、「書くこと」＝「文学」にもそのまま繋がっていくのである。<sup>13</sup> さて、次に見ていくのは、カフカの仕事の概念が、彼の文学作品にどのようにリンクしていくのかということである。とりわけ、2章では、カフカの職業体験が多く反映された『失踪者』を扱う。

<sup>10</sup> 彼は、カフカに初めて生きた話し言葉としてのチェコ語の美しさと力強さを知らしめた人物である。創造的な言語力の持ち主であったといわれている。

<sup>11</sup> Kafka, Franz: Briefe an Ottla und die Familie. Fischer Verlag. 1974. S. 111

<sup>12</sup> Kafka, Franz: Tagebücher Band I: 1909-1912. Fischer Verlag. 1994. S. 45

<sup>13</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 337f プラハ、ドイツ語系ユダヤ作家の言語の問題の特異性について、カフカはプロト宛の手紙で次のように分析している。「彼ら(プラハ、ドイツ語系ユダヤ作家)は、3つの不可能生の中に生きていた(僕はこれをただ偶然に言語的に不可能性といっている、そう呼ぶのが一番簡単だけれども、全く違った呼び方でもできるかも知れない)、つまり、書かないことの不可能性、ドイツ語で書くことの不可能性、他の方法で書くことの不可能性、これほとんど4番目の不可能性を加えることができるかも知れない、つまり、書くことの不可能性だ(つまり、この絶望は、書くことによって安心をもたらすようなものではなかったし、生きることと、そして書くことの敵だったからだ、書くこととは、ここでは、首を吊る直前に遺書を書く人間にとってのように、ひとつの過渡的措置にすぎなかったのだ、- 過渡的措置といっても、実際は一生涯続きかねないものなのだ) だからそれは、あらゆる意味で不可能な文学だったのだ」

この「書くこと」の問題は、カフカ文学において、重要なテーマのひとつである。カフカはこれを“kritzeln”(爪で引っ掻くように書く)という表現を使っている。「書く」とは、「木や石のように硬い面に文字を刻み付けること」という印欧語の語源に由来する。自らが作家と称する人間であれば、カフカのように「私は書く、故に存在する」ということを自ら実践することで、世界とのコミュニケーションをとっていたといえる。

さらに、その生きる徴として書かれた、つまり「眼」でみることのできる言葉は、書字(Schrift)である。書字としての言葉として、手で書かれた文字(Handschrift)があるが、この点については、本論では、詳しく、言及しない。

## 2. 職業体験としての『失踪者』 („Der Verschollene“)<sup>14</sup>

この物語は、主人公カール・ロスマンが、猫が窓から追い出されるようにヨーロッパを追いやられ、新天地アメリカで、遍歴を繰り返し、自分の人生を切り開いていく、一見、ディケンズやゲーテのように、教養小説 (Bildungsroman) の典型的なパターンとも捉えることができる。カフカの日記には、この小説の原型をディケンズの『ディヴィット・コッパーフィールド』から着想を得たことが書かれている。<sup>15</sup>

第一章で見てきたように、カフカは、労働者災害保険局という半官半民のお役所に勤めていたこともあって、無意識裡に、文体が、官庁などで使われている公文書のような趣がある。カフカは、法学博士でもあったため、当然といえば、当然のことである。また、作品にも、『判決』『訴訟(審判)』『流刑地にて』『罪』など、法律用語が多く使われている。さらに、この『失踪者』を意味するドイツ語の „Der Verschollene“ は、法律用語で、「行方知れずになって失踪を宣告された者。忘れられ見失われてしまい、以後、消息を聞かなくなった人」という意味がある。

さて、ここから少し、『失踪者』 („Der Verschollene“) 中の「カフカのモチーフ」を考察してゆこう。

この『失踪者』 („Der Verschollene“) の中で、喪失される一方で、獲得されていくものをカールの成長過程の象徴とする「メディア」として捉える。<sup>16</sup>ここでいう「メディア」とは、自我と社会を繋ぐ役割を担う。この項では、カフカがこのアメリカを舞台とした物語のなかで、獲得したものと喪失していくものを考えていく。アメリカで、喪失されるものは、まず、「トランク」がある。これは、カールがヨーロッパからアメリカに向かう船にいる間は、夜昼も徹して守っていたのに、いざ、船を降りるときに、傘を忘れてきた事に気がついて、船に捜しに行くために、人にトランクを預けてしまう。結局、「トランク」も「傘」も、なくしてしまうのである。

<sup>14</sup> カフカの文学作品の日本語訳としては、決定版カフカ全集全12冊(新潮社、1992)が有名であるが、現在では『カフカ小説全集1-6』池内紀訳(白水社、2002)がある。本論では、その両方の訳語を参考にした。

<sup>15</sup> ディケンズの『ディヴィット・コッパーフィールド』において、叔母のもとへ出発するコッパーフィールドは、「トランク」を盗まれてしまう。さらに、カフカの1917年10月8日付けの日記には下記のような書き付けが見られる。「ディケンズの『コッパーフィールド』(『火夫』は明らかにディケンズの模倣だ。計画中の長編小説『アメリカ』のこと。『火夫』はこの第一章にあたる(引用者注)はなおのことだ。トランクの話、人々を幸福にし、魅了する少年、下賤な仕事、田舎の別荘の恋人、汚らしい家々など。その他、とりわけ、方法を。僕の意図は、今思えば、ディケンズ風の小説を書くことだったのだ。僕が加えたものはただ、僕がその時代から奪い取ってきた、より先鋭な光と、おそらく僕自身が発した、より弱々しい光だけだ。ディケンズの豊かさや迷いのない力強い奔流(...)」Kafka, Franz: Tagebücher. 1914-1923. Fischer. 1994. S. 168 のちに、ヤノーホにも語っている。「カール・ロスマンはディヴィット・コッパーフィールドやオリヴァー・トウイストの遠い親戚です。」G, ヤノーホ『カフカとの対話』(吉田仙太郎訳、筑摩書房、1967年)なお、こんにちでは、逆にこの『失踪者』をパロディー化して、カール・マイとカフカが偶然に船の中で出会うという設定で、描かれた小説がある。Peter Henisch: Von Wunsch, Indianer zu werden. Wie Franz Kafka Karl May traf und trotzdem nicht in Amerika landete (Fischer. 1994)ペーター・ヘーニッシュについては、次のHPを参照のこと。<http://www.peter-henisch.de/> (2008年1月15日現在)

<sup>16</sup> メディア(Media)とは、ラテン語の“medium”の複数形が語源である。ここでは、人間がコミュニケーションをするための手段の媒体だけでなく、現代的な「メディア」の意味、「中間」「媒体」を核として、多義的な概念、様々な場面でもちいる、マーシャル・マクルーハン的な「メディア」として規定したい。彼にとって、「メディア」とは、人間の身体機能の拡張、あるいは、その結果としての人工的媒介物である。

## 2-1. 喪失(Karl Roßmann の Lost)と獲得 - 喪失(Lost)からの出発

	喪失されるもの	獲得するもの
I 火夫	トランク、傘	伯父の庇護
II 伯父		アメリカ風の書物机、英語、ピアノ
III ニューヨーク近郊の別荘	伯父の庇護【手紙の役割】 カールのかぶっていた帽子	グリーン氏からもらった縁なし帽子(アメリカ風)
IV ラムゼスへの道	友人ロビンソン(アイルランド人)とドラマルシェ(フランス人) 両親の写真	トランク、傘
V ホテル・オクシデンタル	エレベーターボーイの仕事	エレベーターボーイの仕事、仕事の同僚、上司
VI ロビンソン事件		
(車が止まった...)	上着	
(「起きろ、起きろ!」...)		
断片		
(1) ブルネダの出発		
(2) (町角でカールはポスターを目にした...)(二日二晩の旅だった...) 「オクラホマ劇場」	技術労働者としての仕事	

この喪失から始まる物語は、その後もやはり、失い続けてゆく。再び取り戻したトランクや傘も自分の不注意から、また、なくしてしまう。さらには、「両親の写真」をなくし、自分が最初についたエレベーターボーイとしての職業、友人だと思っていたロビンソンとドラマルシェとの関係も失ってしまう。

この「喪失」は、ネガティブなものなのだろうか？<sup>17</sup>

この頃、カフカは、仕事人として生きてゆく決意を固める。役人としてのカフカは、仕事には大変忠実であった。この『失踪者』には、様々な職業や仕事の質、仕事関係における階級、同僚、同僚との人

<sup>17</sup> 『あるアカデミーのための報告』で猿が言語を獲得することと同様に、この「獲得」にも様々な意味が含まれているであろう。→ Friedlich Kittler は、『グラモフォン・フィルム・タイプライター(上)』(石光泰夫、輝子訳、ちくま学芸文庫、2006年S.309)で、エディソンが電話を発明したときのことに対して、Chew, 1967:2をとりあげ、カフカの文章から、註釈している。カフカのとらえられた猿が『あるアカデミーのための報告』に取りかかるとき、動物が言語を獲得するこの場面はエディソンの「ハロー」とその保存技術をとともに引用している。「船ではお祭りがあって、蓄音機が音楽を奏でていた」、猿は、彼の通りの前にたまたま起きつばなしになった酒の瓶を飲み干して叫んだ、「どうしようもなく、やむにやまれない気持ちだったので、五感がわななっていたので、大声でただ『ハロー』と。声は人間のものになり、この叫びとともに人間の社会に飛び込んで、彼らが囁き交わすのを聞いた、『おい聞けよ、あれがしゃべってるよ』、それはお汗が滴り落ちていた彼の身体に接物されたようであった。」(Kafka, 1917/1961:162)「言語の獲得」とともに、彼が求めたのは同様に「出口」(Ausweg)であった。„Das wäre an sich vielleicht gar nichts, ist aber insofern doch etwas, als es mir aus dem Kräftig half und mir diesen besonderen Ausweg, diesen Menschenausweg verschaffte. Es gibt eine ausgezeichnete deutsche Redenart: sich in die Büsche schlagen; das habe ich getan, ich habe mich in die Büsche geschlagen. Ich hatte keinen anderen Weg, immer vorausgesetzt, daß nicht die Freiheit zu wählen war.“ (Kafka, Franz: Ein Landarzt. Fischer. 1994. S. 244)

間関係、そして、仕事を失うという事が、その存在を脅かすものとして、位置づけられている。<sup>18</sup>

主人公のカール・ロスマンは、物語の最初に、「僕は、小さいときから、機械いじりが大好きでした。アメリカにくるなんてことにさえならなければ、いずれ絶対に技術者になっていたのに。」<sup>19</sup> といっていたカールは、最後の章の「オクラホマ劇場」で「技術労働者」として採用される。<sup>20</sup> これから見てゆく、仕事に対するカフカ自身のつぶやきとも思える言葉は、カールの口からも多く発せられるのだ。例えば、昼は、モントリオールデパートで働きながら、夜は勉強をする苦学生に対して、次のような感想を抱いている。

「自分は学生のような高い目的をもっていないのだ。故郷にいても終わりまで勉強をやり遂げたかどうか分からない。故郷ですらできなかつたことを、こんな見知らぬ国でやれと、だれが要求できるだろう。自分にできる働き口は見つけないし、働きぶりで認められたい。その気持ちはさらに強くなったが、さしあたりはドラマルシュの使いを引き受けて、それを足場にして機会を待つとする。」<sup>21</sup>

ところで、注目すべきは、このトランクの喪失に関して、既に、カールの父は、呪わしい予言を発している。「いつまで、お前はトランクを持っておられるかな？」<sup>22</sup> この父の呪わしい予言は、冗談ではなくなってしまう。カールはアメリカで自分がヨーロッパから持ってきた大切なトランクを、本当になくしてしまったことに気づき、焦る。そして、カールにとっては、父はどうあがいても、このことを知り得ないことが、唯一の慰めとなるのであった。

例えば、このトランクは、カールの「純粋さ」(Reinheit)<sup>23</sup>を象徴するものとしてとらえることもできるであろう。これは、作品『父への手紙』から続く、コード(code)として、二重の象徴的意味を担う。さらには、恋人ミレナ・イェンスカ・ポラック夫人に宛てた『ミレナへの手紙』<sup>24</sup>においても、その無垢さ(Reinheit)への言及は繰り返されているのである。ヨーロッパの思い出のいっばい詰まった「トランク」は、カールにとって「過去の自分の象徴」としてもとらえることができるのである。

次々と喪失する物がある一方で、獲得するものもある。例えば、「トランク」の喪失は、火夫シューバルや伯父たちとの出会いの前触れとなる。「トランク」を喪失し、シューバルと話しているところに、

<sup>18</sup> Albrecht, Nicola: "Verschollen im Meer der Medien: Kafkas Romanfragment >>Amerika<< Zur Rekonstruktion und Deutung eines Medienkomplexes". Universitätsverlag, Winter Heidelberg. 2007. S. 76ff

<sup>19</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 12

<sup>20</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. カールが卒業した実業中学校(Realschule)の履歴を残しながらも、ネグロ(Negro)という偽名を使って、技術労働者に採用される。>>Negro, ein europäischer Mittelschüler<<(S. 308)>>Negro, technischer Arbeiter<<(S. 311)

<sup>21</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S.271f

<sup>22</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 14

<sup>23</sup> Kafka, Franz: Briefe an Milena. Fischer. 1986. S. 228. 「汚れているのは、僕だ、ミレナ。無限に汚れているからこそ、純粋(Reinheit)を叫ぶのだ。最も深い地獄の中の者たちほど純粋(so rein)に歌える者はありません。僕たちが天使の歌と見なしているのが、実のところ、彼らの歌なのです。」この手紙にも、カフカの無垢さ(Reinheit)への固執が伺える。『父への手紙』における潔癖さ(Reinheit)への言及は、右記を参照。Kafka, Franz: Zur Frage der Gesetz und andere Schriften aus dem Nachlaß. Fischer. 1994. S. 56

<sup>24</sup> 『ミレナへの手紙』は、既に、1952年に出版されている。しかし、当時は、保存されていた手紙から10通あまり、様々な理由により棄てられた。また、少なくとも長めの62のバツページが削除されていた。この1952年版は、編集の仕方等、明らかに多くの点で問題があった。1986年版では、手紙は、ほぼ日付順に並べられ、カフカの手紙がほぼひとつながりの物語となっている。注目すべきは、ミレナがマックス・プロートに宛てた8通の手紙である。この手紙の持つ意味は大きい。さらに、ミレナが書いたカフカのための追悼文と、ジャーナリズムに発したミレナの文章が3つ収められている。残念ながら、『決定版カフカ全集8 ミレナへの手紙』(新潮社、1992)には、訳出されていない。

また、ミレナがカフカに宛てた架空の手紙として、書かれた本がある。Ria Endres: Milena antwortet. Ein Brief. Rowohlt. 1982.



会計主任や船長が登場するのである。カールは、シューバルのために、船の中で行なわれている不正を説明するが、結局はどうすることもできない。この正義への挫折の中で、カールは、伯父と出会うのである。アメリカ風の屋敷で、伯父によって、庇護を受け、「アメリカ風の書物机」や「ピアノ」の習得など、様々なものを獲得してゆくのである。

この「トランク」の喪失は、同時にカールにとって、獲得をしてゆく過程のひとつにすぎないのだ。この喪失の意味は、決して、ネガティブなものではない。実際、「トランク」や「傘」は、次に見てゆく伯父からの手紙とともに、カールのもとにいったん返される。これらの喪失は、絶対に永遠に失ってしまうという事を意味するのではない。ひとつの喪失は、次の獲得への橋渡しとなるのである。何かを失えば、別の何かを獲得するという、人間の成長過程の徴なのである。「トランク」や「傘」を成長のバロメーターとして、はかる事ができるのではないだろうか。

次に見てゆくのは、「手紙」のモチーフである。カフカの生涯において、「手紙」は重要な役割を果たしている。第1章で見てきたように、カフカ自身、仕事上、公文書を書いたりすることが多かったが、プライベートでも、恋人はもとより、友人、家族に手紙を書き送っている。カフカにとって、作品を生成するためには、「手紙」はなくてはならない存在であった。それについて、詳しくは、第3章で見てゆく。

『失踪者』の最初の場面で、カールは、ヤーコブ伯父との出会いは、カールを誘惑した女中<sup>25</sup>の「手紙」がその役割を担う。次に引用するのは、その伯父の言葉だ。

「こんな若い身空で、寄る辺のない生活者として生きていかなくてはならなかったのです。いや、ことによると今頃すでにニューヨークの港町の横町当たりなんかに住みついておったかもしれません。もし当の女中から私宛の手紙が届いていなければ、の話ですがね。手紙はあちこちに転送されたあげく、一昨日、やっと届いたのです。女中はその手紙の中に、私の甥の顔立ちや人相やらを書いておりました。それに賢明な事に、船の名前をあげておいてくれたのです。(…)感動的な手紙と申せましょう。拙い文章ではありますが、善良な抜け目のなさといったものが読み取れましてね。我が子の父親に対する愛情込めて書かれてあるのです」<sup>26</sup>

このように、カールは女中の手紙によって、救われる。そして、叔父の家に住むことができるようになるのである。女中の手紙は拙いけれども、その中で、心のこもった手紙であり、カールは、伯父からの「手紙」の話とともに、女中がよく、手紙を台所で書いていたことを回想する。

カールは、女中が自分のために拙いながらも、心のこもった「手紙」を書いてくれたことによって、僅かばかりの感動を覚える。

心が通い合う手紙がある一方で、その手紙が、人間の関係を引き裂く場合がある。12時に、カールに渡すようにと言付けられていたグリーン氏から渡された伯父ヤーコブの手紙は、カールに決定的な何かを言い渡す。それは、青年カールにとって、自分が大人になる過程で、行われる儀式めいたことでも

<sup>25</sup> カールは、35歳前後の女中のヨハンナ・ブルーマー(Johanna Brummer)によって、誘惑され(verführen)、その女中に子供ができたため、両親の手によって、アメリカへ放逐される。Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 33

<sup>26</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 34f

あるのだ。そして、手紙の中の伯父の言葉は、カフカ自身の父親の言葉と重なってくる。作品における「手紙の役割」に注目するために、全文を引用する。

甥よ！

残念なことと一緒に暮らしたのは短い間だった。その間に私が原理を尊ぶ人間である事は気がついていただろう。周囲の者たちに、また当の本人にも、大変、厄介な原理信奉だが、まさにこれによって現にあるところのものを築き上げてきた。だから誰にも、これを否定するのは許さない。愛する甥にもだ。そしておまえは、私の原理に歯向かった最初の人間だ。この名を記し、のちのちのために記録して賞賛したいところだが、さしあたっては、その必要はない。今日の出来事にてらして、断固としておまえを追放しなければならない。今後、決して我が前に現れないこと。手紙も使者も許さない。おまえの意思によって、そして私の意思に反して今夜、わがもとから離れたのであれば、みずからの決意のもととどまることだ。それが男の決断だ。この伝達を友人グリーン氏に委託する。グリーン氏が助言をしてくれるだろう。いまの私は、その気になれない。グリーン氏は世慣れた人物なので、おまえの自立の門出に際し、助言と助力を惜しまない。別離にあたり、また手紙を閉じるにあたり、改めて述べておく。おまえの家族から届くものは、ろくでもないことばかりだ。グリーン氏が忘れるかもしれないので、あえて触れておくが、おまえのトランクと傘を返しておく。では、元気で。

伯父ヤーコブ<sup>27</sup>

この手紙は、「12 時になったら」カールに渡すようにと強調される。この必要なまでの時間厳守<sup>28</sup>はカフカにとってはまた、特徴的なことである。例えば、『訴訟』に登場するヨーゼフ・K は時間を守らないために、訴訟の経過は次第に悪化してゆくのである。この手紙は、伯父によってしかるべきときにしかるべき場所で、グリーン氏によって手渡されるようにという風に指示がある。

これらの時間厳守は、「手紙」をもってきたグリーン氏も、すでに、伯父のもとに帰りたいというカールに次のように言う。

「夜はゆっくりしたいね。でも、任務は果たさなくちゃあならない。今、11 時 15 分だから、もうしばらくポランダーさんと相談して、けりをつけるとしよう。ここにおられては邪魔でもあるし、あなただってクララさんという方がずっと楽しいだろう。12 時きっかりに戻ってきてもらいたい。そのときに、しかるべきことをお伝えする。」<sup>29</sup>

<sup>27</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 96f

<sup>28</sup> 時間の変質の効率主義は、自然科学とその技術的応用によって、私達の住む世界の感じ方や思考過程の変容をしいた。そもそも、「時間」という言葉はギリシア語の「クロノス」(χρονος)と「ホーラー」(ωρα)という言葉がある。後者は、英語の「アワー」(hour)の語源になっていて、この「時間」の意味に慣用される「ホーラー」という言葉の基本的意味は、天地悠久の秩序としての「季節」であった。その形容詞形「ホーライオス」(ωραιος)は「時間に合わされた」という意味で、ヘシオドスの神の正義と労働の重要性を説いた教訓叙事詩『仕事と日々』(Ergakai Hemerai)に見られるように「ホーラー的」というのは「時宜にかなった」という意味において、「正しいこと」「正義」という人間行動の規範を示す概念と重なるものであった。カールが、火夫シューバルのために行なった「正義」は、『失踪者』の第三章、では、手紙を渡す「時間」や伯父の家へ帰宅する「時間」の子細な言及に変容されていると言えよう。本論の第一章の仕事上の手紙において、カフカが仕事の上での時間に関する規定を記述しているところがあるが、そもそも役所の「仕事」とは、時間厳守をもって、画一的に行なうものでもある。

<sup>29</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 89

すでに、伯父のもとに帰りたいという、カールに対して、グリーン氏は必要なまでに、12 時という時間にこだわっている。このゲームのように、取り交わされる会話は、何かの意図、『掟の門』の門番の旅人との間に取り交わされる問答のように、様々なコードが隠されているとは考えられないだろうか。

さらに、物語の中で、カールはまた、直接的なコミュニケーションを避け、いったん決別したロビンソンに、手紙でのコンタクトを要求する。

「...何か伝えたいことがあれば、手紙をくれるだけでいい。ホテル・オクシデンタル、エレベーターボーイ、カール・ロスマン、これだけで事足りる。繰り返すが、ここには来ないでもらいたい。勤務についているんだから、訪問客のための時間がない。...」<sup>30</sup>

このように「手紙」が他の作品でも重要な役割 - 例えば、『判決』でのたわいもないロシアの友人に手紙を書き送るが、その友人は、架空の人物であるという事を父に指摘される - を果たすように、『失踪者』でも、象徴的な役割を担う。カフカにとって、コミュニケーション手段として、自分の気持ちや感情表現をするためには、文字を通しての間接的なコミュニケーションが必要であった。

では、この直接的なコミュニケーションを避ける根底になっているものについて、もう少し考えてみることにしよう。それは、前述した、カフカの『父への手紙』に言及される「純粋さ、清潔さ(Reinheit)」へのこだわりである。これは、書くという事に対する「純粋さ」、でもある。カフカにとって、「書くこと」とは、「自己保存の闘い」でもあった。この「自己」を純粋に保つためには、孤独でなければならない。『父への手紙』や日記、恋人たちへの手紙に繰り返される、結婚生活という他者との生活の共有は不可能なのである。

さらに、この『失踪者』における、「ホテル・オクシデンタル」もまた、『父への手紙』、「純粋さ、清潔さ(Reinheit)」の象徴としてのコード(code)<sup>31</sup>として言及されているのではないだろうか。「ホテル」という場所について、フェリーチェに言及している手紙もある。<sup>32</sup>

「ホテル」という空間<sup>33</sup>は、一目で見渡せる四方の壁に囲まれた空間を1つの部屋として持っている。このひとりで、閉鎖できる空間を自己が所持すること、限られた所有物だけがある、つまり、戸棚、机、衣装棚など一定の場所においてある事を把握できるということ、これは、書くという行為のために、自

<sup>30</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 165

<sup>31</sup> ここでいうコード(code)とは、(1)規定、規則、つまり、『掟』(2)暗号。であり、(2)の意味において、電信符号にも繋がってゆく。

<sup>32</sup> Kafka, Franz: Brief an Felice. Fischer. 1976. S. 71f 1912年11月3付けのフェリーチェへの手紙が参考になるだろう。

<sup>33</sup> ここで言う「空間」は、ギリシア人が「コーラー(chora)」あるいは「トポス(topos)」と呼んで意味するところの、物や我々自身は今、そこにいる(場)という具体的な内実を失って、むしろ物と物との位置的な関係を規定する抽象的な枠組みのようなものに変容していると考えられる。それは、あらゆる方向に均一な等方的空間であり、時間が先述のように空間として翻訳され、計量の対象となるということは、このような方向的な空間へと翻訳されることであり、空間そのものが計量・測量の対象に変容しているということが前提となる。このエレベーターやホテルという空間は、人間が日常に生きて生活する空間とは異なる非日常的な空間として人工的な観念である。ここでも、エレベーターやホテルという空間を、このような人工的で抽象的な観念の象徴として、実体化、実在化し、それを自然なものとして実感させている。

前述の「時間」「空間」の均等な媒体(メディア)としてとらえることにより、人間の支配権の拡大化をすべて厳密な計量化の可能な対象としている。これは、人間王国(regnum hominis)のなかで、「利便性」「効率性」「合理性」の目的のために必要不可欠な操作であった。今日の私達は、このような効率主義にあわされた「時間」「空間」に生きることを強制されている。

己を「純粹」かつ「孤独」に保つために、最適な場所とはいえないだろうか？これは、ある新しい、使い古しではない、より良いものになると定められた、できるだけ緊張した生活を送る、という、感情の息吹をカフカに与えてくれるのである。さらには、閉鎖された空間、という意味で、「エレベーター」という空間のコードにもつながってゆく。「ホテル」や「エレベーター」という空間は、「形象(Bilder)」<sup>34</sup>として捉えることができる。

ところで、このような職場に対するカールの関心の高さは、伯父の職場を観察するところからすでに始まっている。職業と機械は、密接な関係にある。さらに、伯父の職業の光景には、そこにその当時まだ珍しかった「電話」<sup>35</sup>についての記述がある。この光景はまさにカフカの電話を使った仕事の光景と重なってくる。次に引用するのは、その詳細な記述の場面である。

「ある種の代理業、運送業にあたり、おそらくヨーロッパには見当たらないものだった。たしかに仲介をするのだが、生産者と消費者との商品の仲介でも、商人のあいだの仲介でもなく、さまざまな商品と材料を大きな工場カルテルに取り次いだり、あるいはカルテル同士の媒体をする。そのため購買や貯蔵、移送、販売のすべてにわたり介入してきて、様々な顧客と電話や電信で結ばれている。伯父の会社の電信室は、カールの郷里の町の電信局よりも大きいのだ。電信局に関わりのある同級生がいて、案内されたことがあった。伯父の会社の電話室には、電話ボックスのドア(die Türen der Telephonzellen)が整然と並んでいて、ベルの音ときたら耳を聳する程だった。(伯父が最寄りのドアを開けると、眩しい明かりの下に係の人がいた。ドアの音に頓着しないのは、頭に鉄のバンドをはめ、両耳にイヤホーンをつけているからだ。重たげに右腕を小机にのせていた。)指に鉛筆が握られていて、これが機械のように整然と、迅速に動く。電話で伝える言葉は、ほんの数語に限られていた。話すことに異議を申し立てているようで、正確に問い返したが、返ってきた言葉によって問い返すのをやめにしたというった感じだった。そのあと目を落として、書きつける。」<sup>36</sup>

さらに、「ロビンソン事件」の章でも、カールの電話に対する驚きの描写は、鮮明に描かれている。この子細な描写は、まさに、観察する人であるカフカの姿そのものから来ているのである。このような仕事の現場を見る目は、自己を認識するための手段なのである。人間は、自分で自分をみることはできない。人と世界との繋がり(メディア)を持つことによって、自己を外化し、外化したものを通してまた、自己を観察することができる。人は、メディアなしには生きることができない。あるいは、外化した自己と自分自身のずれ-疎外-の感覚を通して、改めて、自己を認識するのである。機械は、そのひとつの場合であるにすぎない。カールにとって、この機械への興味、観察は、カフカ自身をも外化し、対象化したものであった。外化された記号としての装置には、カフカの職業体験が、何重にも投影されているのである。ある意味で、機械は、人間に似ている。冷たい機械の機械的な動きが、突然思いがけな

<sup>34</sup> カフカは、晩年の若い友人ヤノーホに、『失踪者』について尋ねられたとき、次のように語っている。「それ(『失踪者』)は、副産物にすぎないのです。私は人間を描いたのではないのです。私はある出来事(eine Geschichte)を物語ったのです。そこにあるのは一連の形象(Bilder)です。」『カフカとの対話』(グスタフ・ヤノーホ、吉田仙太郎訳、筑摩書房、1967)

<sup>35</sup> カフカ自身、「電話」に対して、恐怖感を抱いていた。参照：Kafka, Franz: Briefe an Felice. Fischer Taschenbuch Verlag. 1976. S. 102. und S. 265.

<sup>36</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 53f

く、強烈な人間的意味を持って迫ってくる一瞬があるのかもしれない。カールがその最新の機械技術を観察するとき、その観察がカールにもたらす「発見」の喜びは、その自己がなすものと重なってゆく。次に、引用する箇所も、その仕事の中で、使われる「電話」の描写である。

「(...) 最新型の電話(dies jene neuesten Telephone)で、特別のボックスなど必要とせず、ベルの音もささやきのように小さい。話し手も小声で話せば、拡声装置によって相手方には十分大きな声として届いているのだ。三人が電話で話しているのを聞いていると、受話器のなかの出来事を小声で復唱しているようであり、また隣の三人は、ほかの誰にも聞こえない音に押さえつけられたように頭を垂れ、せせせと書き取りをしている。ここでも三人の電話係それぞれに一人のボーイがついていた。三人のボーイは代わる代わる聞き耳を立てて首をつき出し、まるで巨大な黄色い紙の束の中にねじ込まれたかのように――途絶える事なくザワザワとページをめくる音がしている――電話番号を探し出すのだ。

カールは実際、目を丸くして見つめないではいられなかった。」<sup>37</sup>

電話はなによりも、「人間の声」が透明になる。そして、その声が、ひとつの意味へと透過されてゆくのをもまったく認めないほど生々しい生理的な現前を声に与える。たとえば、カフカの『城』のように、「たえまない電話のやりとり」を「ざわめきと歌」へと収斂させていくような、同時に交わされる多くの会話の交錯によって、言葉の意味の限界をあっさりと通り過ぎてゆく。<sup>38</sup>

電話するということをカフカが、情報技術以上に夢見た事は、疑いもない。彼は、この夢の四日前に、

あずまや  
「庭の四阿」という雑誌の1863年版で、最初の電話の実験に関するフィリップ・ライスの文を読んでいたそうだ。この論文は「音楽通話」というタイトルであった。この題からしてすでに、そのときの器械が話を伝えるためには何の役にも立たず、カフカの夢に見られた電話の受話器のように、音楽を伝える役にしか立たなかったということは想像がつく、とキットラーは分析している。<sup>39</sup>

また、カフカはプラハからベルリンに宛てて、彼の愛するフォノグラフ製造会社の女子社員(婚約者フェリーチェのこと)に書いている「ところで、ベルリンではパルログラフ(Parlographen)が、プラハで

グラモフォン  
は蓄音機(Grammophon)が電話につながれ、このふたつがちょっとしたお話を交わすという想像はまったく楽しいものではありませんか。」<sup>40</sup>

1924年には、合衆国の研究者が中間周波数生成という、本来ラジオのために開発された技術をサウンド・プロセッサにも応用することを思いつく。その結果、本来なら人間の耳の可聴領域を超えているコウモリの鳴き声が周波数を下げられ、レコードに収録された。この実験が行われたプラハで、カフ

<sup>37</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 202

<sup>38</sup> Vgl: 『グラモフォン・フィルム・タイプライター (上)』(フリードリヒ・キットラー、石光泰夫、石光輝子訳、1999、ちくま学芸文庫) S. 139

<sup>39</sup> Vgl: 『グラモフォン・フィルム・タイプライター (上)』(フリードリヒ・キットラー、石光泰夫、石光輝子訳、2006、ちくま学芸文庫) S. 140

<sup>40</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice. Fischer. 1976. S. 265f

カの『ヨゼフィーネあるいは鼠族』が書かれる直前に、プラハの新聞は少なくともそう伝えているのだ。

この事実は、カフカの『ヨゼフィーネあるいは鼠族』の執筆に大きな影響を与えているのはまず間違いないであろう。

「ヨゼフィーネの芸術は本当に歌と言えるものなのだろうか」と、カフカの鼠たちは自問自答する。「あれは実のところ、ピィピィ、ないている(ein Pfeifen)だけではないのか。ピィピィ鳴くことなら、むろんわれわれは誰でも知っている。それはわが民族の本来得意とする技(Kunstfertigkeit)なのだ。あるいは技(Fertigkeit)なんてものではなくて、個性的な生命の兆しというだけの事かもしれない。我々は誰もがピィピィ鳴く。そしてもちろん、それを芸術(Kunst)だと主張するものなど誰もいない。我々はそれに注意を払うことなくピィピィ鳴いている。気づいてすらいなくらいだ。ピィピィ鳴くことがわれわれの特徴のひとつなのだとすることを全然知らない者も、われわれのなかには大勢いる。」<sup>41</sup>

第1章で見てきたように、仕事上の手紙では、カフカが、機械技術こどのような見解をみせていたのかということが分かる。第1章では、カフカが仕事の際に機械の使用にあたり、技術的な指導をミコラシエック(Mikolaschek)教授に受けるよう推奨した手紙があった。それは、仕事において、実務に重点を置いたときに限り、必要とされることであった。この手紙には、実務家としてのカフカの近代機器への観察の高さ、その技術をいち早く仕事に取り入れていこうとする姿が浮かび上がってくる。一方で、プライベートな手紙には、その技術が人類を没落へと導くであろうという予言をしているのである。この点については、第3章でみてゆく。

さらに、カールの最新の機械技術に関する関心の高さについて、もう少し見てゆこう。『失踪者』の中で、カールは、アメリカ式の近代的な書物机<sup>42</sup>について、詳細に観察する箇所がある。少し長くなるが、近代技術に対する詳細に観察するカールと重なるカフカの「眼」の記述に注目するために、全文を引用しよう。

部屋に置いてあるアメリカ式の書き物机(ein amerikanischer Schreibtisch)、カールの父親が欲しがっていた。いつも競り落とすことができなかった。この部屋にある机は、アメリカ式と称して競売にかけられるものとは、ずいぶんとちがっていた。

たとえば、こちらの机には無数のひきだしのある上物がついていて、合衆国大統領だって、書類ごと

<sup>41</sup> Kafka, Franz: Ein Landarzt. Fischer. 1994. S. 275

<sup>42</sup> この「書物机」に対する興味は、1902年8月24日付けのオスカー・ボラックに宛てた手紙上にも現れている。「僕は、自分のすてきな書物机に座っていた。君はこの机を知らない。また知っているはずもない。これはつまり、庶民的な勉強机である。ふつうものを書くときに膝がくる場所に、ぎょっとするような木のとんがりかたが2つある。(..) 僕のすてきな机に座って、君宛てに2通目の手紙を書いていた。分かるだろう、一通手紙を書くとき、これはもう先頭をきってゆく羊のようなもので、たちまち手紙の羊の群れが20頭も、つぎつぎに後を追ってゆくだけだからね。」(Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer. 1975.S.11f)

さらにキットラーは、このような「書物机」における視点が、19世紀初頭、ロマン主義における離身現象に現れる点に注目している。近代以前の变身物語とは違い、近代において、ドッベルゲンガーは、近代的「個人」の営為となった。今までは、精神分析学はこの離身現象を精神医学的に読み解いてきた。近代的な「個人」が、近代的エクリチュールの装置＝「書物机」において生成されてきたことをキットラーは要因としてあげているのだ。それが、20世紀、視覚メディアにおいてどのように比重を移してきたか。ドッベルゲンガー現象を巡る理論的ディスカールの歴史の変遷から、それぞれの時代のエピステム(episteme)を考察している。参照：『ドラキュラの遺言-ソフトウェアなど存在しない-』(産業図書出版、1998、原克、他訳)

にぴったりの引き出しが使えただろう。しかもわきに調整装置がついていて、ハンドルを回すと引き出しの並びや位置を自由に変えられるものだ。薄い側板がゆっくりと下におりてきて、別の台底板ともなれば、さらに別の引き出しの上蓋ともなる。クルリとまわると、まったく別の棚に見える。ハンドルを回す速度で、ゆっくり変わったり、慌ただしく入れ替わったりした。最新の発明というものだが、カールはクリスマスの市で見たキリスト降誕の人形芝居を思い出した。同じ年頃の子供たちと一緒に、厚ぼったい冬服に包まれて眺めていたものである。おじいさんがハンドルを回していた。すると人形が動くのだ。3人の王がギクシャクと前へ進み、星が輝いた。聖なる馬小屋に幼子が誕生する。うしろに母親が立っていたのだが、ちゃんと見ていないような気がしたので、カールは背中にくっつくほど母を引き寄せ、さらに声をあげて注意を促した。草むらに兎が隠れていて、後脚で立ち上がったりののである。それからまた走り出すのだ。あまり声を上げるものだから、母親が手でカールの口をふさいだりした。母はそれからまた、ぼんやり眺めているようだった。この机はむろん、そんな思い出と何の関係もなかったが、しかし、発明するにあたって、似たような何かが変わったのではあるまいか。伯父はカールとちがって、この机が気に入ってなかった。ごくふつうの机にするつもりだったのに、いまではどの机にも新しい装置がつけてある。これまでの机にも簡単に取り付けられるのが特徴なのだ。調整装置はなるたけ動かさないように、と伯父は言った。伯父によると、便利さを見せかけているので壊れやすくできしており、修理するとなると、ずいぶん費用がかかるというのだ。それが、いい訳であることは、すぐに分かった。調整装置は取り付けが簡単なのだ。伯父はそれを無視していた。<sup>43</sup>

既に、述べられているように、長編小説の主人公がカフカの等身大の姿で描かれているが、カールのこのような観察には、カフカの近代技術を鋭く観察する視線がある。カフカの近代技術に対する見解はこの人形のからくりのたとえ話に象徴的に、現れている。ここでカールは、「アメリカ式の書物机」をみたときに思い出すものとして、子供の頃みた「クリスマスの市で見たキリスト降誕の人形芝居」の一場面を引用している。この近代的な書物机をみたカールの視点は、まさにカフカが近代メディアを観察する視点と同様である。そして、この「最新の発明」をするにあたって、「似たような何かが変わったのではないだろうか」と疑問を投げかけている。何が変わったのか、その当時の本人は知る事ができないが、この「最新の発明」がカールを通してみたカフカに大きく影響を与えたに違いない。また、こういった機械に関する詳細な観察は、カフカの作品『流刑地にて』にも、処刑台の装置を詳細に記述しているところにも現れているのである。このような近代技術の記述表現は、カフカ自身のデジタル・アナログ感覚を識別するリトマス紙のような役割を果たしていると考えられる。

最後に、もうひとつの近代メディアである「写真」についての言及も見逃せない。次に引用するのは、カールが、料理長の部屋で見る「写真」だ。

「男を写したなかでは、若い兵士の写真がカールのお気に入りだった。軍服のボタンは、写真

<sup>43</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 47f

(Photographie)を撮ったあとから、金色に塗ってあった。どれもヨーロッパの写真で、たぶん裏に書き入れがあるのだろうが、カールは手を触れたくなかった。この写真のように、いつか自分の部屋に両親の写真(Photographie)を飾りたいと思った。」<sup>44</sup>

この「写真」のコードは、なくした「両親の写真」の伏線と繋がっていく。すでに、この「写真」への言及は、既に、「ラムゼスへの道」から始まっていたのである。カールは、両親には、決して手紙など書かないと誓うが、両親の写真を見ながら、自分の両親の事、故郷の事を思い出す。

「彼のもとには一枚きりしかないので、なおのこと注意して写真をながめた。いろいろな側から父の視線を捉えようとしたが、いくらローソクの位置を変えても、父は少しも、生きたようにはならなかった。まっすぐのばした髭もちっとも父に似ていない。撮影が悪いのだ。これに対して母の方はずっとまじだつた。悲しみをこらえたように口をかたく結んでいた。むりに微笑もうとしている。だれが見ても、すぐに同じように感じるだろうとカールは思った。印象の明瞭さ(die Deutlichkeit dieses Eindrucks)がいやになるほどだ。いったい、一枚の写真から、写された人の隠された心が、まがいなく読み取れることができたものか。カールはしばらく写真から目をそらした。あらためて目をやったとき、母の手に気がついた。安楽椅子からダラリと下がっていて、つい思わずキスをしたくなる。両親に手紙を書いてもいいのではないかとカールは考えた。二人から手紙をよこすようにいわれていた。(…) カールは、微笑みながら両親の顔をじっくりと見つめた。息子からの手紙を、まだのぞんでいるものかどうか。」<sup>45</sup>

しかし、この写真は、いつの間にか、喪失されてしまう。大切な写真を必死になって、取り戻そうとする。「ドラマルシェのポケットに何があっても取り出さなくていい。写真だけでいいんです。」<sup>46</sup>

このようなカールの哀願にも関わらず、カールは、両親の写真を見つけることができない。

たった一枚の両親の写真をじっくりと観察するうちに、実際の両親とコンタクトをとりたいと思えてくる。しかし、その被写体には、「写された人の隠された心」など読み取ることができないのである。

「写真」の発明は、ものの対象を写し取ることにある。写真は、また、同時に二つの機能を兼ね備えていなければならない。ひとつは、写真は対象と似ていて、いわば、創りだされたものであること、もうひとつは、この対象との酷似が、対象そのものによって、機械的に生み出された物であるということ、である。実際の対象物に光を当て、その像を写真という層に機械的に刻印するということは、この二点による類似が保証されていなければならないのだ。この対象そのものを映し出した複写は、物質、物体のリアリティをそのまま再現することになる。写真というメディアの存在は、これまで、発明されてきた技術と同様、この当時の人々にとって、大変、珍しいものであったに違いない。この写真は、その対象と酷似しているが、それは、あくまで、似ているというだけで、実際の対象とは別のものである。このメディアの存在は、驚愕であった。キットラーは、このような写真をはじめとするメディアについて、

<sup>44</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 138f

<sup>45</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 106f

<sup>46</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 130f



次のように分析している。「メディアとはそもそも、幽霊の出現をしか伝達しないものなのだ。ラカンもいうごとく、死体という単語すらまだ生易しいような何かだからである。(Lacan, 1978/ 1980: 294 参照)<sup>47</sup>このようなメディアの存在を描写し言葉として表現する事は、簡単ではない。

カフカの作品に見られる写真などの詳細な描写は、写真というメディアそのものなのだ。「写真が対象と似ている」だけでなく、「この類似が対象そのものによっていわば作り出されたものであるということ」この二点をカフカの「眼」は正確にとらえている。<sup>48</sup>それが、この詳細な写真の描写、とりとめもない風景に反映されている。そして、それは、「幽霊の出現をしか伝達しないもの」なのである。つまり、形象化したものを文字による媒体で表現する「カフカ」＝「メディア」の図式がここに成立する。

以上、『失踪者』の中に見られる「獲得」と「喪失」をテーマとするメディアを取り上げてきた。また、「タイプライター」については、第4章の「私的な手紙の中の仕事」の項に細述してゆく。

カフカもまた、近代メディアが発達する過程に生まれた寵児であった。そういった近代テクノロジー、タイプライターなどをカフカは、仕事の中で使いながらも、そのテクノロジーに対する不安<sup>49</sup>を次章の「ミレナへの手紙」にも予言していた。「テクノロジーは、いわゆる人間というものから文字を吸い上げ、どこかに運びさってしまった」とキットラーは分析している。カフカが、生きた時代には、蓄音機＝聴覚技術メディア、映画＝視覚技術メディア、タイプライター＝書文技術メディアというこれら3つのメディアが華麗に、登場した時代でもあった。このメディアの変遷によって、人類には何が起こったのだろうか？カフカが、『失踪者』に組み込んだコード、「喪失されるもの」と「獲得するもの」として描かれるメディアのコード(code)は、カフカの先見の明として読み取ることも可能ではないだろうか？これら可視のものとして描かれる「トランク」「写真」などは、決して、とどまることを知らず、現れては喪失される。しかし、決して永遠に喪失されてしまうということはないのである。それは、いつのまにか、物語上に、記述されずに、そのままとなっている。物語の舞台にとけ込んでしまっているのである。すなわち、新しく出現したメディアが私達の生活にいつの間にかとけ込んでいるように。

さて、次の項に見ていくのは、『失踪者』に登場する、職業というラベルの役割である。カールが出会う人々は面白いまでに、様々な階級の様々な職業を有している。さらに、民族も多種多様である。ふつう以上にその民族によるレッテルと職業が強調された書き方になっている。このテーマに含まれる仕事の質、仕事のやり方、仕事関係の階級社会、仲間同士の助け合いは、この小説のサブテーマとなっていることも既に、知られている<sup>50</sup>

<sup>47</sup> 『グラモフォン・フィルム・タイプライター (上)』(フリードリヒ・キットラー、石光泰夫、石光輝子訳、2006、ちくま学芸文庫) S. 40

<sup>48</sup> カフカは、前述の晩年の友人にも次のように語っている。「人が写真を撮るのは、ものを意味の外に追い払うためなのです。私の各書物は、一種肉眼を閉じる事なのです。』『カフカとの対話』(グスタフ・ヤノーホ、吉田仙太郎訳、筑摩書房、1967)

<sup>49</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer. 1975.S. 113. この1913年2月20日のゲルトルート・ティーベルガー宛の手紙には電話に対する記述がある。「じつは『カルメン』には行けなくなりました、今日は午後の勤務があるのです。電話のときに忘れてしまっていました、大体が電話機の前に出ると、いつもそれにこそなにかも忘れてしまうのです。」

<sup>50</sup> Albrecht, Nicola: "Verschollen im Meer der Medien: Kafkas Romanfragment >>Amerika<<- Zur Rekonstruktion und Deutung eines Medienkomplexes", 2007 Universitätsverlag, Winter Heidelberg. S. 76ff

## 2-1. ラベルのように貼られた職業と国籍

登場人物	職業
カール・ロスマン (ドイツ人、ボヘミアのプラハ生まれ)	エレベーターボーイ→技術労働者
火夫 (ドイツ人)	ロスマンが乗った蒸気機関の従業員
蒸気機関の船長 (ルーマニア人)	船長
エドワード・ヤコブ (ヨーロッパで生まれ育つがアメリカに移住)	上議院議員、会社経営者 (仲介業の一種)
ポランダー (アメリカ人)	伯父の取引相手?
グリーン (アメリカ人)	伯父の取引相手?
ロビンソン (アイルランド人)	浮浪者
ドラマルシュ (フランス人)	浮浪者
ホテル・オクシデンタルの料理主任 (ドイツ人)	料理主任、ドイツからアメリカに移住して苦労して現在の地位を得る
テレゼ・ベルヒトルト (ポーランド人)	料理主任の秘書
ジャコモ (イタリア人)	ホテル・オクシデンタルのカールの同僚 エレベーターボーイ
ブルネダ	有名な歌手
ヨーゼフ・メンデル (アメリカ人?)	苦学生。昼はモントリー・デパートの店員
ファニー (カールの幼なじみ)	オクラホマ劇場の天使のトランペット吹き

『失踪者』に描かれる職業分類を鋭く見つめるカフカは、これまで見てきたのと同様に、彼自身の職業体験から多く来ていると考えられる。職業作家ではなく、「書くこと」を通じて、社会とコンタクトをとろうとするカフカ。しかし、自分の仕事は決して、楽しいものではない。そんな中でも、カフカは自分の任務には、忠実で、慎ましく生きていたのである。

上記の表のように、それぞれの登場人物には、見事なラベルのように、職業と国籍<sup>51</sup>が張り付けられていて、それぞれの役割を演じている。

最初の場面で、伯父は、いう。「この私のご当地アメリカに滞在するようになりまして、すでに長い歳月がたちましたーいや、滞在等という言葉は、もはや身も心もアメリカ市民というべき私には不適當でありましょうーこの長い歳月の間、ヨーロッパにおりますところの血縁とは、まったく疎遠に過ぎてまいったのであります。」<sup>52</sup>

さらに、カール自体、「国籍のちがいがからくる偏見(nationalen Voreingenommenheiten)によって、よ

<sup>51</sup> ダニエル・ユイレ(Danièle Huillet)とジャン＝マリー・ストローブ(Jean-Marie Straub)は、映画『階級社会-カフカ「アメリカ」より』の中で、この物語の登場人物について、アメリカにおける「階級社会(Klassenverhältnisse)」のありようとして読み替えている。この映画は、カフカの映画化された作品の数少ない成功例のひとつである。

<sup>52</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 32

からぬことが企まれていると言うつもりなのだろうか。」<sup>53</sup>という言葉によって、国籍おける不安の現れのような言葉を発している。この国籍の違いからくる不安は、どこからきたのだろうか？

次に引用するのは、Kafkaが、親しい付き合いのあった女性ヘルヴィッヒ・ヴァイラーに書き送った手紙である。

僕の生活は、いまやまるで無秩序です。確かに、80 クローネという薄給のポストで、8、9時間というとんでもない勤務時間だけれども、事務所以外の時間を僕は、野獣のように(wie ein wildes Tier)むさぼり食っている。これまで、自分の生活を1日6時間に制限する事に馴れてはいないし、おまけにイタリア語まで勉強しているし、近頃のすてきな日々の夕方を外で過ごしたいので、とても忙しい自由時間を切り上げるときには、疲労はあまり回復していない。

ここからは、事務室で。僕は、一般保険会社(イタリアに本拠をもつ、国際的な大会社)に勤めていて、ともかく自分もいつかずっと遠い国々の肘掛け椅子に座って、事務室の窓からサトウキビ畑だの、回教徒の墓地だのを見たいという望みを抱いている、それに保険制度のこと自体は僕にはとても面白いけれど、当面の仕事はやるせない(traurig)ものなんだ。<sup>54</sup>

初めて、勤めた一般保険局の仕事で、成功したいという野心を抱く中、Kafkaにとって、仕事はやはり「やるせないもの(traurig)」であった。

このようなKafkaの言葉は、『失踪者』の中の学生の言葉とも、重なってくるのである。学生ヨーゼフ・メンデルは、昼間は、アメリカの大企業モントリー・デパートの店員として働きながら、夜は、勉強を続けている。この学生の言葉からも、上記のKafkaと重なる言葉が発せられるのである。<sup>55</sup>

「ひょっとするとデパートに、ぼくの働き口はないでしょうか？」と聞くカールに、「探してみるんだね。(…)あるいは探さない方がいいかもしれない。ぼくにはモントリーでいまの口を見つけたのが、人生最大の成功だったといえるね。学問か、勤め口かを選べといわれたら、もちろん、勤め口を選ぶさ。この選択が正しいことを実証するために努力しているようなものなんだ。」<sup>56</sup>

この言葉は、Kafka自身が、ミュンヘンで、文学を勉強する計画を断念して、職業を選んだということ<sup>57</sup>、あるいは、「書くこと」(文学)との両立を可能にする、労働者災害保険局という職場を得た事に満足しているという、自己慰謝が重なってくるのである。また、学生が、夜、寝る時間も削って、勉強を

<sup>53</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 29

<sup>54</sup> Franz Kafka: Brief an Hedwig Weiler vom 8. 10. 1907, Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 48f

<sup>55</sup> Kafka自身の言葉として発せられる台詞は、主人公のカールだけでなく、そのほかの人物からも発せられるのは特徴的である。

<sup>56</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 269f

<sup>57</sup> 「僕も、勉強をしたかったんです」というカールに対して、学生は、「勉強をやめたの喜びたまえ。僕がこの数年続けているのは、終わりがなければいい事なんだ(nur aus Konsequenz)。満たされる事はほとんどないし、将来の見込みなんて、もったない。どんな見通しが期待できるというのだ！アメリカには、ベテナーのような博士がうじゃうじゃいるんだ。」(Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer. 1994. S. 269) このカールと学生の会話は、KafkaともうひとりのKafkaとの対話ともいえる。「書くこと」とは、自己との対話でもある。

続けているのは、カフカが、夜、「書くこと」を続けている自分の姿を重ねているともいえる。既に、この長編小説については、「自分と全く関係ない事は書いてはいない」、と 1912 年 12 月の中旬にフェリーチェに宛てた手紙で書いている。

『失踪者』において、カールは、自分がつきたいと思っていた職業に関して、次のように言う。「小さいときから、ぼくは機械いじりが大好きでした。(…) アメリカにくるなんてことにさえならなければ、いずれきっと技術者になっていたと思います」<sup>58</sup>

技術者になりたいというカールの願いは、何度となくその後も繰り返され、学生との会話でもそのことに関して、言及している。そして、ついには、最終章の「オクラホマ劇場」で、その夢を果たすのである。

さらに、職業は、自分の身分と地位を保証してくれるコード(code)として機能している。<sup>59</sup>これらの職業なしには、自分の存在を社会的に位置づけることができない。カールは、最初、オクシデンタル・ホテルで、エレベーターボーイとして採用される。しかし、「ロビンソン事件」のために、カールは、エレベーターボーイとしての職業を失ってしまう。職業の喪失は、人間そのものの存在価値を脅かすものとして、『失踪者』では描かれている。

また、それぞれの民族が特徴的な役割を果たしていることが分かる。「国籍のちがいがらくる不都合をいいことに、よからぬことが企まれていると言うつもりなのだろうか」という不安の現れを「火夫」の場面で表現している。これらの国籍に対する不安の現れは、既に本論の第 1 章「カフカの仕事の概念」で見えてきたカフカ自身の職場における民族関係の複雑さが反映されていると考えられる。アイルランド人であるロビンソンに会ったときにも、カールは、偏見を持っていた。

「ドイツのかたですね」

カールは確認したかった。アメリカへやってくる新参者が脅威にさらされている、特にアイルランド人は危険だと言った事を、何度も聞かされた。<sup>60</sup>

さらに、アイルランド人に対する偏見はなおも続く。次に引用するのは、「ラムゼスの道へ」の章で、カールが、アイルランド人のロビンソンとフランス人のドラマルシェに出会った時の印象を描いたものである。

一人がアイルランド人というのが好ましくない。どんな本だったのかはもはや思い出せないのだが、家で読んだ一冊に、アメリカではアイルランド人に気をつけるようにと書いてあったのがあった。(…) カールはもう一度、ろうそくをつけて、アイルランド人をじっと観察した。フランス人よりも、むしろ好

<sup>58</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 12

<sup>59</sup> 『許容 (審判)』のヨーゼフ・Kは、「銀行員」、『城』のKは、「測量技師」である。そのほか、『田舎医者』、『新任弁護士』、『航海士 (Steuermann)』、『火夫』などの職業をタイトルにした作品が数多くある。

<sup>60</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 10

感のもてる顔つきで、頬にあどけなさが残っており、眠ったまま優しく微笑んでいる。少し離れたところでつま先立ちして、カールは確かめた。<sup>61</sup>

このように、それぞれの民族に対する偏見は、カフカの職業上の体験と重なるとともに、この『失踪者』では、それぞれの職業とともに、コード(code)としての機能を果たす。「喪失されていくもの」と「獲得されていくもの」におけるコードでは、「トランク」「手紙」「ホテル・オクシデンタル」がカフカの内部(自我)と外部(社会)を繋ぐ役割を果たしている。これらのコードは、全体としてみると、何の意味も持たないカフカの瓦解した世界を描いているかのように考えられる。しかし、その小説の部分に光を当てて、読み解いていくと、カフカの創作における疎外された生のきわめてリアリティを持った記録である事がわかる。独身者の極限された生活圏は、純粹である。無関心で、非情な、鋭く研ぎすまされてゆく眼は、生きながら死んでいるために、他の人よりも多く、他の人とは別のように世界を捉えてゆく。<sup>62</sup>カフカ自身、いつも誰かから、観察されているという気持ちがつきまっていたが、自分自身は、もっと精密に自己を観察しなければならなかったのである。観察するとは、この場合、分析してゆく事である。この章で見てきた登場人物の詳細な台詞や事物の描写は、そのようなカフカの数々の観察と分析の蓄積なのである。生きた人間のように先入観や偏見に囚われる事なく、中途半端な感傷や愛情に振り回される事もない、実務家カフカの冷ややかな一面を露呈しているのである。

仕事とは、自己を対象化する行為のひとつである。仕事で結果は、自己の外化したものに意味を持たせようとする行為に他ならない。カフカの職業体験が、カールの仕事への関心の高さへの言及と重なるとともに、『失踪者』の作品としての完成度にも繋がってゆくように思えるのである。

この物語は、他の長編小説『訴訟』や『城』とは違う、具体的な事象で構成されている。この物語の「未完の完結性」についての言及は、1913年4月4日のクルト・ヴォルフ宛の手紙が参考になるだろう。

「長編(ここでは『失踪者』のこと)の第一章は前から大部分が筆写済みでありますから、これもまちがいなくすぐにお送りいたしますよ、(..) これだけ独立して出版できるかどうか、私には分かりませんが、この章の後に500ページ、それも完全に失敗したのが続くのだとは別に気づかれたりはしないでしょうが、いずれにしても十分に完結したものとは言えないかもしれません、これは断片(ein Fragment)であり、またいつまでも断片のままということになるでしょう、こうした未来形が、この章に最大の完結性(die meiste Abgeschlossenheit)を与えるのです。」<sup>63</sup>

<sup>61</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 105

<sup>62</sup> 「死者の国は、ひとつの文化がもたらすデータ保存の可能性とデータ送信の可能性に応じていくらかでも広大なものになる。クラウド・テラヴェライトが書いているのだが、メディアというものはいつでも彼岸の飛行装置になる。文化が始まるときに墓石というものがシンボルとしてそこにあったというのであれば、(Lacan, 1966/ 1973-80: I 166 参照) われわれのメディア技術はありとあらゆる神々をも招喚できるであろう。生者必滅ということについて古くからの嘆きはただ文字によって書かれているだけであって、文字と感覚のあいだの溝は、それだけではどうしても埋まらない。だがそうした嘆きもいまやたちどころに止むことであろう。メディアの風景の中でふたたび不死のものたちだけが存在するからである。」『グラモフォン・フィルム・タイプライター (上)』(フリードリッヒ・キットラー、石光訳、2006. S. 43) この分析に照らし合わせると、カフカの文字に対する感覚は、メディアそのものの存在ともいえる。

<sup>63</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 115

### 3. 私的な手紙の中の仕事

カフカの文学人生は、「手紙」に始まり、「手紙」に終わる。「手紙」は、カフカの人生の哲学あるいは、美意識のあらわれなのだ。この章では、これまでのカフカの仕事と作品に見られた根本的な活動原理である、「手紙」を中心に考察していく。カフカの文学作品の生成のダイナミズムは、「手紙」によって、知ることができるだろう。実際には、渡されなかった手紙として作品『父への手紙』は有名であるが、それ以前に、高校時代の友人オスカー・ポラックに宛てた「手紙」において、既にその兆候が現れている。さらに、マックス・ブロートに宛てた手紙も印象的だ。<sup>64</sup>

手紙の筆跡にさえ、カフカは言及している。この筆跡への関心は、恋人や友人に宛てた手紙や作品の書き方にまで現れているが、まずは、1907年8月28日のマックス・ブロート宛の手紙を見てみよう。「君が、僕の以前に書いたもの(Schrift)をもっている人間を見つけたというのも、ありうることだ、いまはしかし、僕の書体は変わった(ドイツ式の筆記体からラテン式へ)、そして君に手紙を書くときにしか、僕は僕の一字一字の、いまは過去となった筆の運びを思い出さなくなっている。」<sup>65</sup>

手紙の虜になったカフカは、同時に、1912年11月13日の手紙でこう語っている。「最愛のマックス、(ベッドから口述。無精ということもあるし、ベッドで煮詰められた手紙(ausgekochte Brief)がその場でずっと紙上に移されるという便がある。)」そして、長い手紙の最後は次のように締めくくられている。「こうした手紙のすてきなところは、結局のところ先へ進めば進むほど真実ではなくなってきたという点だ。僕はいま、最初の頃よりもずっと楽になっている。」<sup>66</sup>

このように、手紙に対する熱烈な関心は、作品生成のダイナミズムとして、なくてはならないものであった。そのような中であって、私的な手紙における、仕事上の記述をもう少し観察してゆく事にしよう。そこには、カフカの仕事に対する熱心さや仕事と密接な関係にある機械についての記述が見受けられる。そして、そのような複雑な手紙に対する思いは、当時の郵便制度が影響していたこともわかる。

親しくなった女性の友人ヘルヴィッヒ・ヴァイラーに宛てて、仕事をし始めた頃、次のような手紙を書き送る。

愛しい人、まずは事務所にて、タイプライター音楽の伴奏付き(Schreibmaschinenmusik)にて、取り急ぎ、優雅なる乱筆を。(…)

嫌な一週間でしたねえ。事務所では仕事がそれこそ山ほどあるし、きっと当分はずっとこんな調子かもしれないね、そう、お墓代を自分で稼いでおかなければならない、それに加えて、これはいずれいつか君に話すことにしよう、要するに僕は野獣のように(wie ein wildes Tier)追い回されていた、それに僕は

<sup>64</sup> マックス・ブロートに宛てた1904年の『トニオ・クレーゲル』のことを何も書いて寄越さないことに腹を立てた手紙も印象的だ。カフカ自身、言い聞かせている「彼(ブロート)には、僕が彼から手紙をもらったとどれほど喜ぶかが分かっていて、そもそもトニオ・クレーゲルについては何か一言あるべきなのだ。明らかに彼はむしろ僕に手紙を書いたのだが、いろいろ偶然とか、集中豪雨とか、地震とかのせいで、手紙も行方不明になってしまったのだ」そして、締めくくりに言葉には、「この手紙も行方不明になればいいのだ。」と書き終えている。(Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 31)

<sup>65</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 38

<sup>66</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 111

野獣なんかじゃない訳だから、どんなに疲れたことだろう。<sup>67</sup>

1912年12月4日のフェリーチェ宛の手紙では、「熱心な役人(ein eifriger Beamter)として待ち受けるタイプライターのところに行きます、まるであなたがそこに連れて行き、僕がよく働いたら御褒美にキスを約束でもしてくれたように。(…)今はとにかくタイプライター(Schreibmaschine)へ！」<sup>68</sup>と仕事におけるタイプライターの使用を書き付けている。カフカは、仕事には好んで、タイプライター(Schreibmaschine)を使用していた。

また、「あなたの仕事(Arbeit)はどうか、僕の少女よ？」と問いかける1912年12月20日から21日付けのフェリーチェに宛てた手紙では、次のように書き送っている。

あなたがおそらくそうであるほど独立的には、僕は仕事がとてもできないでしょう。責任を蛇のように僕は避けます。いろいろなサインをしますが、しないですんだサイン(Unterschrift)はいつも利得のように思われます。僕はまたサインをすべて(そうしては本来いけないのですが)まるで僕の負担が軽くなりでもするように、ただ F・K とだけ書きます。だからまたすべての事務上のことではタイプライター(Schreibmaschine)に魅きつけられるのです、なぜならその仕事は、とくにタイピストの手で行なわれると、いかにも匿名的ですから。しかし他の点では賞讃すべきこの用心深さは、僕があつた F・K で最も重要な用件をも、よく読みもしないでサインし、僕の忘れっぽさのために、一度机から出ていったものは僕にとって全く存在しなくなる事によって、補足され相殺されるのです。<sup>69</sup>

本論の第2章「職業体験としての『失踪者』(„Der Verschollene“)」では、タイプライターについて、言及をしなかったので、ここで少し述べておこう。ポーランド人で、料理主任の秘書テレゼ・バルヒルトが、料理主任の手紙を口述している場面がある。

ホテルに着くと、すぐに事務室に案内された。料理主任がメモ帳を手に持ち、若いタイピスト(Schreibmaschinistin)に手紙を口述していた。一語ずつはっきりした発音で、それをタイプライター(Schreibmaschine)が、しっかりした音を響かせて書き取っていく。タイプライターの音のあいまいに、おりおり壁の時計のチクタクという音がした。すでに11時を過ぎていた。<sup>70</sup>

カールは、詳細に、このタイピストの様子を観察する。この当時、タイピストは、ほとんど女性の職業であった。その当時まだ、珍しかったタイプライターについて、カフカもまた、キャリアウーマンであった、かつての恋人フェリーチェ・パウアーには、1913年1月22日から23日付けの手紙<sup>71</sup>で、次

<sup>67</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer: Verlag. 1975. S. 54f

<sup>68</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice Fischer Verlag, 1976. S. 154f

<sup>69</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice Fischer Verlag, 1976 S. 196

<sup>70</sup> Kafka, Franz: Der Verschollene. Fischer: 1994. S. 133

<sup>71</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice Fischer Verlag, 1976 S. 264ff. キットラーはこの手紙に関して、既にあげたように分析を行なっている。『グラモフォン・フィルム・タイプライター (下)』(フリードリヒ・キットラー、石光泰夫、輝子訳、ちくま学芸文庫、2006、S. 287)

のように書き送っている。

ところでホテルの件は希望を捨てないで、熱心な実務家(eifriger Geschäftsmann)としては、半年経った今日、あらためて試みるべきでしょう。何件かホテルは、口授録音機(Parlographen)を買ったのでしょうか?いくつかのホテルに無料で録音機を使用させ、それによって他のホテルに購入せざるを得ないようにするのも、悪い投資では決してないかもしれません。ホテルは一般に競争が激しいのです。

そういうわけで、僕の新しいアイデアは次の通りです。

1. タイプライター事務所が設立され、そこではリントシュトレームの口授録音機で口授されるものすべてが原価で、あるいは最初導入するときにはたぶん原価以下で、タイプライターに転写されます。タイプライター製造会社とこの目的で提携すれば、総経費はもっと安くなるかもしれません、宣伝また競争上の理由からタイプライター会社は有利な条件を提供するでしょうから。

(..)

5. 電話と口授録音機との連結を発明する。これは実際それほど難しくありません。(..)もっと困難な事は、それでもおそらく可能な事は、蓄音機と電話の連結でしょう。より困難な理由は、そもそも蓄音機のしゃべる言葉が理解できず、録音機は明瞭な発音をしてくれと頼む事ができないからです。蓄音機と電話の連結はそれほど一般的意味をもたないでしょう。ただ僕のように電話が恐い人間にだけひとつの安堵をもたらすでしょう。もっとも、僕のような人間は蓄音機(Grammophon)も怖がるので、こういった人間にはどうしようもありません。

私的な手紙にさえ、仕事のことを書き付けている。カフカにとって、仕事の熱心さは、なみなみならぬものであった。その一方で、出版社には、作家になりたいという、願いも書き送っているのである。次の引用は、1917年7月27日に、クルト・ヴォルフ社に原稿に対して熱心な批評をもらったお礼に書いた手紙<sup>72</sup>である。

私は現在の職<sup>73</sup>を棄て（この職を棄てるというのが、そもそも私の持つ一番強固な希望であります）、結婚し、プラハを離れて、多分ベルリンへ行きます。私は、いまのうちからそう信じてよければ、そうした場合にも文学上の収入だけを当てにするようなことはないと思いますが、それにしても私は、というか私の内部に奥深く巣食っている役人(der tief in mir sitzende Beamte)が（これはおなじことですが）、そのような折のことを考えて気の減入のような不安を覚えています、私はただ、ヴォルフ様、あなた様がそのようなときにも私をむろん私が半ばでそれに値することを前提としての話ですが、完全にはお見捨てにならぬことを願うばかりです。

における、最後の言葉、「文学はハイテクの条件のもとでは、これ以上いう言葉をもたない。文学は解釈を拒んでわずかに傍受を許すだけの暗号と化してしまっている。(..)書物にとってはあいも変わらずそれでことが足りている幼稚園でいどの算数から、保護連結装置や表面波フィルター、あらゆる四則演算のできるデジタル信号プロセッサに至まで(Bamford, 1986: 136参照)その未来に欠けているものは何もない。溝、閃光、星々記憶、伝達、ネットワーク化すること、これである。」これは、この手紙における、カフカのネットワーク化の理論からきているのであろうか。

<sup>72</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer: 1975. S. 157f

<sup>73</sup> カフカの勤めていた半官半民の「ボヘミア王国プラハ労働者災害保険局」のこと



「内部に奥深く巢食っている役人」とは、忌み嫌う役所の中の自分であり、作家になりたいと願いながらも、官僚という自己の現実を冷徹に見るまなざしでもある。カフカがリアリストとして、現実社会の職務を全うしながらも、自分自身の現実を軽蔑しているのである。オーストリア＝ハプスブルク帝国の末期、パトロンによって擁護されていた芸術家たち（例えば、リルケ）は、生活のため、自ら収入を得るために、文学とは直接関係のないような仕事をしなければならなかった。仕事が、自らの生活を支える基盤となったのだ。

しかし、私は、ここで、カフカがひとりの「実務家」であったと言いたいのではない。そのように、現実の職業生活と葛藤をしながらも、「僕は文学に造詣が深い訳ではないのではなく、文学からできているのです。僕は文学以外の何者でもなく、また文学以外ではあり得ないのです。」<sup>74</sup>とっているように、芸術家として生きたいと願っていたのである。そして、そんな「芸術家」としてありながらも「実務家」としての「生」を内包していたということを強調したいのである。

もう少し、カフカの手紙をみてゆこう。こちらは、手紙でコミュニケーションをとりたいと願いながらも、その境地に達し得ない作家の内的告白である。<sup>75</sup>次に示すのは、その有名な手紙論の中の一部である。カフカが生涯のうちで、親密な関係になった女性の一人、ミレナ・イエンスカに宛てて送った手紙に、その記述が見られる。これは、1922年3月末に書かかれたとされている。ミレナとの文通がしばらく途絶えた後に、書かれているのである。

あなたもご存知でしょう、僕がどんなに手紙を憎んでいるかを。僕の人生のあらゆる不幸（こんなことを申して嘆きの声をあげようとしているのではありません。世の中の人々にも教訓となるように、これを確認しておこうというのです。）は、手紙から、あるいは、手紙を書くという行為にあるのです。人はほとんど僕を欺いたためしがありません。しかし、手紙は常に僕を欺いてきました。それも、他人の手紙が欺いたのではなく、僕自身の手紙が僕を欺いたのです。僕の場合には、これ以上お話ししたくない特別な不幸ですが、しかし、同時にまた、世の中の人にも当てはまることです。簡単に手紙を書くことができるという可能性は、（純粹に理論的に見てですが）人間の魂の恐ろしい混乱をこの世にもたらすに違いありません。これは、幽霊たちとの交霊(ein Verkehr mit Gespenstern)<sup>76</sup>にすぎず、それも、手紙の宛先の幽霊ばかりではなく、自分自身の幽霊との交霊でもあり(nicht nur mit dem Gespenst des Adressaten, sondern auch mit dem eigenen Gespenst)、この交霊は、書く人の手元で、書かれる手紙

<sup>74</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice Fischer Verlag, 1976 S. 444

<sup>75</sup> カフカは、仕事には好んでタイプライターを使っていたが、松澤和宏氏は、そのような「公的/私的」「手書き/非・手書き」それぞれの二項対立を4種類のエクリチュールに識別している。「公的な/手書き」(近代以前の写本)、「公的な/非・手書き」(近代の活字テキスト)、「私的な/手書き」(近代的草稿)「私的な/非・手書き」(パソコンなどの電子メディア、プライベートなE-Mail)。なお、ここでいわれる「近代」とは、ルネッサンス以降を指し、草稿との関連では活字印刷の発明以降ということになる。(松澤:『生成論の探求』S. 31)

<sup>76</sup> この „Gespenst“ の意味は、様々に解釈できるであろう。(1) 幽霊、妖怪 (2) (比喩的に) 迫りくる黒い影、不安、危機 (3) (複数形で) 目の虫、竹節虫(3)の意味については、カフカの「眼」の問題と考え合わせると、また、新たな解釈ができそうである。語の由来は、古高ドイツ語の „locken“ (呼び寄せる、誘惑する)にあたる。カフカの意味する „Gespenst“ とは、生半可な言葉では表現できない。「メディア」と同様、得体の知れないものであり、ギリシア神話でいう、9つの頭を持った「ヒドラ(Hydra)」あるいは、日本でいう「鵺」にあたるかも知れない。

の中に書くそばから成長し、あるいは、ある手紙が他の手紙を証拠付け、この手紙を証人として引き合いに出せるというときには、一連の手紙のうちにも、成長してゆくものです。人が手紙でコミュニケーション(Verkehr)をとれるなどと、どうしてそんなことを思いついたのでしょうか！遠い人には、思いを巡らせ、近い人を手にとらせることならできますが、それ以外の事は、いっさい人間の力を超えています。手紙を書くとは、しかし、貪欲にそれを待ちもっている幽霊たちの前で、裸になる事(sich vor den Gespenstern entblößen)に他なりません。書かれたキスはしかるべきところには届かず、途中で、幽霊たちに飲み尽くされてしまうのです(werden von den Gespenstern auf dem Wege ausgetrunken)。この豊かな滋養によって、このように法外な繁殖を遂げるのです。人類はこれを感じ、これに闘いを挑んでいます。人類はできる限り、人間たちの間の幽霊じみたものを閉め出して、自然とのコミュニケーション、つまり、魂の平和に到達しようとし、鉄道、自動車、飛行機を発明しましたが、しかしこれももはや役に立ちません。すでに転落中になされた発明であるに間違いなく、敵側は遙かに余裕をもち、遙かに強力で、郵便の後には電信を発明し、さらに電話、無線電信を発明しました。幽霊たち(Die Geister)は、飢えるときを知らず、我々は没落してゆくことでしょう。<sup>77</sup>

いかに自分が手紙を憎んでいるか、ということが語られる一方で、カフカの手紙に対するひとつの奇妙な解釈が展開される。カフカによると、何が自分を欺いたのではなく、ひとえに手紙が欺いたのであって、それも受け取った手紙ではなく、自分がこの手で書いた手紙がそれをした、というのである。これは、まさに、カフカの解釈すべてに当てはまりそうであるが、この手紙の講釈は、人類のコミュニケーション手段の発明、つまり、郵便、電信、電話、無線電信が、人類の不幸を呼ぶという予言にまで及んでいくのである。<sup>78</sup>

さらに、死後の数年前 1922 年 1 月下旬、カフカの主治医であり、若い友人であるローベルト・クロップシュツックに宛てて、次のように書き送っている。

僕にはその手助けをしてくれる人が必要なのだろうか？しかし確かに、手助けが僕には必要だ。それに君の言うこともそれ自体正しい、とはいえ僕は、現実に絶えず難破の憂き目に会って想像以上の船の

<sup>77</sup> Kafka, Franz: Briefe an Milena. Fischer Verlag, 1986. S. 301ff. すでに、カフカは、この手紙の中で、「簡単に手紙を書くということが出来るという可能性は、人間の魂の恐ろしい混乱をこの世にもたらすに違いありません。」と述べている。文明の発達におけるコミュニケーションの利便性の追求について、危惧を抱いていたのだろうか？終わりのない「プロメテウス(Prometheus)」の運命は恐ろしい。「人間は道具をつくる動物である」が、人間のような「不完全な存在」が、神に近づくために、火を手に入れたが、それは幸福なことであったのだろうか？火=技術、そして、「道具」が発達したものが「機械」と見なされる。(参照: 『インターフェイス-コンピューターと対峙する時』関口久雄、ひつじ書房、2002. S. 12) カフカの「プロメテウス(Prometheus)」については、1916 年頃に書かれたアフォリズムを参照。Kafka, Franz: Beim Bau der chinesischen Mauer. Fischer. 1994. S. 192f

<sup>78</sup> キットラーは次のように分析している。「かくしてカフカ/バウアーの事例においても、生き残ったのは幽霊だけであった-時代に即した文学素材の、メディア技術によるプロジェクトとテキストという幽霊だけが。」(『グラモフォン・フィルム・タイプライター (下)』フリードリヒ・キットラー、石光泰夫、輝子訳、ちくま学芸文庫、2006. S. 212) 「メディアという名の幽霊は、だがしかし、絶対に死ぬことがない。ひとつがどこかで終われば、別のものがどこかで始まる。文学は遺囑のあいだの無人地帯で死ぬのではなく、技術によって再生産される可能性があるということのうちに死ぬのである。」(同書 S. 14)

つまり、キットラーによるとこのカフカが言うところの „Gespenstern”とは、「メディア技術によるプロジェクトとテキスト」ということになる。これは、キットラーの続く著書『ドラキュラの遺言』(„Draculas Vermächtnis“ Technische Schriften, Leipzig, 1993.)と重なるものであろうか。

横梁に追いつがるのに忙しく、おそらくそれ以外のことにはことごとく腹を立てるしかないわけなのだ。とくに手紙に関しては、男性からの手紙も女性からのもの。手紙というものは僕を喜ばせたり感動させたりできてすばらしいものだと思うのだが、昔は遥かにそれ以上のものだった、そのあまり、いまや手紙は、生活のひとつの基本的な形式ではありえなくなってしまった。僕は手紙に騙されたことはありませんが、手紙によって自分を騙してきたのだ、一山の手紙をそっくり火にくべたときについて感じた熱のように(als der ganze Haufen Briefe ins Feuer kam)、文字通り何年もの間、暖をとりだめしていたのだ...<sup>79</sup>

カフカにおける手紙も、彼の生きた時代の複雑な郵便制度が反映されている。次の手紙は、その複雑さについて述べている手紙の一枚だ。同日に手紙と原稿とを書留速達で送ったにもかかわらず、それが同日に届かないことについて、1918年11月、マックス・ブロートに嘆きの手紙を書き送っている。

どうか、マックス、お願いがある。同封の手紙で分かるように、原稿がヴォルフに届いていないのだ。僕は同封の伝票が証拠になる郵便はがきを一枚と、手紙を添えた原稿とを、同じ日にヴォルフに送っておいたのだ。はがきの方(ヴォルフは手紙と言っている)は着いて、原稿が着いていない。どちらも書留速達で送ったのだ。君のほうで督促してもらえないだろうか。僕は郵便というものをどう使いこなすのか、分かったためしがない、新国家<sup>80</sup>の郵便には、もう完全にお手上げだ。<sup>81</sup>

このようなカフカのコミュニケーションの複雑なあり方も、オーストリア・ハプスブルク帝国末期における複雑な郵便制度という外的な要因があったということも付言しておかなければならない。

#### 4. 結論

第1章では、カフカ自身の仕事の概念を見てきた。そこには、「実務家」カフカの姿がある。第2章では、カフカの職業体験がどのように作品『失踪者』(„Der Verschollene“)に反映されているかということを観察した。この章では、とりわけ、文字による不可視の部分にコード(code)によって読み解いていくゲームとして、作品『失踪者』を提示した。そして、この文学作品が、カフカの職業体験を反映させた文字を媒体(メディア)にして無限大に広がってゆく可能性を示唆した。この作品は、完成品としてのひとつの作品と見なすのではなく、常に、挿入、削除、イメージ創造力が先行する未成品としてのテキストを求めるカフカの意図が伺えるのである。この作品は、二重の構造をもつ。つまり、デジタルとしての創造力と、アナログとしての実体験である。第3章では、私的な手紙における仕事を巡る「実務家」の記述を観察した。

カフカは、「文学になりたい」という願いから、できるだけ完全に自分の仕事と同一化しようと努めていた。そして、自分が小官吏であるという現実を全うしながらも、自分の使命のために、「書くこと」

<sup>79</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 369

<sup>80</sup> 1918年10月28日チェコは独立を宣言し、2日後スロヴァキアが加入した。

<sup>81</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Verlag. 1975. S. 246

を続けてきた。文学と一体になりたいという願いのために、自分の結婚生活という日常を嫌悪するまでになった。カフカが見た夢はあまりにも滑稽であり、不可能なことをはっきり意識していたのである。文学と現実生活の挟間で、芸術家として生きる道を見いだすことはなかったのだろうか。そのひとつは結婚して、家族をもつということである。カフカにとって、「二つの生」と「二つの現実」に自分を分けることは決して不可能ではなかったのだ。書き続けること、そして、「書くこと」を演じることによって、見事なまでに、「芸術家」に内包された「熱心な実務家(eifriger Geschäftsmann)<sup>82</sup>」の役割を果たしていたのだと言える。それゆえ、自分の人生全体を「仕事」にも「芸術」にも捧げることができないというインターフェイスの「生」を生きたのである。しかし、それは決して真の「芸術家」でないということではない。

古代ギリシア人が、本能的に感知し、洞察していたように、本来、世界・自然のあり方と人間のあり方と人間の生き方・行為のあり方(カフカにおいては「書くこと」といってもよいだろう)は、表裏一体となって、切り離すことができないものである。この事実は、時代がどう変わろうとも普遍的な事実には違いない。それゆえ、この両者の無理な切り離しによって達成された文明科学の発展の成果というのは、必然的・不可逆的に人間の生き方と行為のあり方、その経験と意識構造の中にブーメランのように跳ね返ってくるのである。そして、その人間の意識に響かざるを得ないのである。この仕事におけるカフカの体験が、看過されるのは、文学という行為に限定してしまったときにおこるのであろう。ゲーテも自分の公務がもたらす、負担によって執筆ができない、と言っていた。しかし、カフカにおいても、もし、彼の職業体験がなければ、このような『失踪者』『訴訟』『城』は生まれ得なかったであろう。

カフカ自身、1904年のMax Brod宛の手紙で次のように書いている。

「僕は、『トニオ・クレーゲル』を今、読み返すよりも、以前に、そんな風に君の物語(『深紅への遠足(Ausflug ins Dunkelrote)』<sup>83</sup>)が広範囲に渡って似ていると思ったことがあった。というのは、『トニオ・クレーゲル』の新しさはこうした対立(市民vs芸術家、生vs精神の対立)の発見にあるのではなく、(ありがたいことに、僕はもうこうした対立を信じる必要はない、この対立は人をおびえさせる)、この対峙に対する特有の有益さを内包した(『遠足』の中の詩人)愛おしさ(in dem eigentümlichen nutzbringenden (der Dichter im >>Ausflug<<) Verliebtsein in das Gegensätzliche)<sup>84</sup>にあるのだ。」<sup>84</sup>

この「芸術家」と「実務家」の「対峙に対する特有の有益さを内包した愛おしさ」とは、その実は、カフカが生き延びる上で、実際的な狡猾さを身につけながら、文士として身を処していったということではないだろうか。つまり、「芸術家」としての「生」を生きる上で、仕事における「実務家」としてのもうひとつの「生」を内包して生きてゆくすべをリルケ以降の詩人たちが<sup>85</sup>が、そうして生きただけで、カフカ自身も本能的に、知っていたと言える。

<sup>82</sup> Kafka, Franz: Briefe an Felice Fischer Verlag, 1976 S. 265

<sup>83</sup> Max Brodが1909年Berlinで出版した本のタイトル

<sup>84</sup> Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer. Verlag, 1975 S. 31

<sup>85</sup> Rainer Maria Rilke(1875-1926)のような芸術家のあり方は、ルー・ザロメに宛てた手紙で伺い知ることができるだろう。「私たちは二つの性を生きるには作られていません。」(ブレーメン近郊、オーバーノイラント発、1903年8月8日付け)リルケの場合においては、自分の人生全体を諷に捧げ、他の一切のものに目を向けないために、その1つだけを断固として選びとったのである。